

岩崎卓也先生のご逝去を悼む
—先生が私たちに託されたメッセージ—

2018年2月4日、1970年代から1990年代にかけて東京教育大学助教授、筑波大学助教授・教授を歴任された岩崎卓也先生がご逝去されて、早1年が過ぎ去ろうとしております。岩崎先生のご逝去を改めてお悼み申し上げるとともに、ここでは、先生のご経歴と業績を振り返りつつ、先生が筑波大学考古学教室で学ぶ私たち後輩に託されたメッセージについて考えてみたいと思います。

初めに、岩崎卓也先生のご経歴を箇条書きしてみます。先生は1929年7月9日に旧満州、中国東北区熊岳城でご生誕されましたが、その後のご学歴は以下の通りです。

- ・1942年3月 中国天津市日本人小学校、大連市南山国民学校を卒業
- ・1942年4月 大連市大連中学校に入学、1945年3月 同校を修了
- ・1945年4月 海軍経理学校予科に入学 同年8月復員する
- ・1946年4月 長野県野沢中学校4年に編入学、1948年3月 同校を卒業
- ・1948年4月 長野県立長野北高等学校3年に転入学、1949年3月 同校を卒業
- ・1949年7月 東京教育大学文学部日本史学科に入学、1954年3月 同校を卒業
- ・1954年4月 明治大学大学院文学研究科（夜間）に入学、1955年3月 同校を中退

このご経歴を見ても、まさに太平洋戦争と敗戦直後の混乱に直接向かいあわれた学生時代であった、と言えましょう。そしてその混乱の中に、岩崎先生が考古学を目指された理由があったのです。先生ご自身がそれを語っておられますので、長くなりますが、その部分を引用してみしましょう。

「私どもが育った時代は遠い昔、太平洋戦争の最中でした。たくさん先輩たちがつぎつぎに戦争で死んでいく。そんな状況の中で私どもは中学校に上がったわけでありました。もちろん私は大の愛国少年でした。先生方が教えてくださる日本の歴史というものは、すべてが真実だと思っておりました。この世界に冠たるすばらしい歴史を持つ日本が、今や存亡の時にある。私たちは力を尽くして、この国を守らなければいけないと、真剣に思ったものでした。歴史教育の影響をもっとも素直に受けた一人だと私は思っております。（中略）予科生徒になった半年後に、戦争が終わりました。そして学校に戻ってきたところが、教えられる歴史の内容ががらっと変わっているのです。私が知っていた神々の世界に代わって、縄文時代という時代が出てきました。このような入れかえがつぎつぎに繰り返されて、私の頭の中にあった歴史像は片っ端から覆ってしまったのです。そう言う中、一番考えさせられたことは、国家って、いったい何だったのだろうか、ということでした。と申しますのは、私どもの多くの先輩たちは、国のためにと行って死んでいったのだからです。そのため、戦後歴史教育の中で、私にとって衝撃的だった、国の成り立ちのところを、大学にはいったら勉強してみようと思えるようになりました。最初、私の心の内にあったのは、教科書がアメリカの指示により変えられたのはけ

しからんと、きっと私たちが学んだ歴史に真実があったはずだ、それを自分の手で確かめたいという気持ちの方が強かったのも確かです。そして私は、東京教育大学を受験いたしました。その頃、私は肥後和男先生が民俗学的な立場から日本神話の研究をなさっておられて、そのあとを和歌森太郎先生が継承されているという話を聞いたからです。東京教育大学にはいて、神話を勉強するんだ、それが私が教育大を受験した理由でもあったわけであります。

しかし大学に入って、あれこれ考えているうちに、日本の古代のことをだれもが分かるように示せるのは、即物的といひましようか、事実をもって、示すことができる考古学ではないか、と考えるようになりました。考古学を専攻しようと考えだしたのは、大学二年生の時でした。』(『考古学と私』『筑波大学先史学・考古学研究』5, 1994)

ここで明らかなことは、岩崎卓也先生が考古学を目指されたのは、敗戦という大きな歴史の節目を経験されたためでした。太平洋戦争時に愛国少年だった先生は海軍経理学校に入ったのですが、敗戦によってそれまでの日本の始まりが神々の栄光の歴史から縄文時代に突然置き換わってしまったことに、強い衝撃を受けられたのです。そして、国とは何か、国家とは何かを真剣に考え、考古学を学ぶ決心をされたのでした。国家や権力など、実態を見ることが難しいことを、即物的な考古学を武器に自分の目で確かめる。そして自由に議論する。考古学から、国家の形成や権力の発生を探究するという研究テーマをライフワークとされた背景は、まさに「国のために」といって死んでいった先輩たちに、国とはこのようなものだったのです、と答える必要があったからなのでした。

古墳時代を研究テーマに卒論を書かれ、1954年3月に東京教育大学史学科日本史学専攻を卒業されました。そして同年4月に明治大学大学院文学研究科に入学(1955年3月に中退)、同時に東京教育大学文学部の教務補佐員にもなられ、先生の長い研究者人生が始まっています。その後のご職歴を箇条書きしてみましょう。

- ・1954年4月 東京教育大学文学部教務補佐員に採用
- ・1958年4月 東京教育大学文学部教務員(教育職)に配置換
- ・1965年5月 東京教育大学文学部助手に昇任
- ・1975年7月 東京教育大学文学部助教授に昇任
- ・1976年12月 筑波大学講師に併任
- ・1977年4月 筑波大学歴史・人類学系助教授に配置換(東京教育大学助教授は併任)
- ・1984年9月 筑波大学歴史・人類学系教授に昇任
- ・1988年4月 筑波大学歴史・人類学研究科長に併任(1992年3月まで)
- ・1992年4月 国立歴史民俗博物館考古研究部教授に併任(1993年3月まで)
- ・1993年3月 筑波大学を定年退官
- ・1993年4月 東京家政学院大学人文学部教授(2000年3月まで)
- ・1993年4月 松戸市立博物館長(2008年3月まで)
- ・2006年4月 (財)古代オリエント博物館長(2010年3月まで)

この間、日本大学や早稲田大学などにおいて非常勤講師を務められるとともに、本務の傍ら、日本学術会議会員や、日本考古学協会会長、日本西アジア考古学会会長、長野県をはじめ多くの自治体の文化財審議委員など、数々の公職もこなされています。

岩崎先生のご職歴を一瞥すると、まさに東京教育大学文学部と筑波大学歴史・人類学系に奉仕された研究者人生と言えると思います。そして、東京教育大学の考古学研究室（考古学民俗学を合わせた研究室で、史学方法論教室と呼んでいました）の立ち上げ時に教務補佐員となられてから教務員、助手と20年以上にわたり縁の下で力持ちとして考古学研究室を形にされ、さらに筑波大学に移られてからも、16年以上にわたり先史学・考古学研究室の屋台骨を支えられたのです。この間、先生にとって、大きな画期が2つありました。第1は1960年代末の大学紛争、そして第2は1970年代半ばの筑波転任でした。

東京教育大学に教務補佐員として奉職されてから1960年代後半まで、岩崎先生は専ら日本列島の国家形成期に当たる古墳時代初期の土師器研究に没頭されます。「土師器研究の諸問題Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」（『大塚考古』3,4,5, 1961, 1963, 1964）、「古式土師器考」（『考古学雑誌』48-3, 1963）、「土師器の編年」（『歴史教育』12-3, 1964）、「東日本における土師器の研究」（『東京教育大学文学部紀要』46, 1964）、「甗小考」（『信濃』18-4, 1966）、「真間式土器小考」（『大塚考古』8, 1967）など、信濃や関東の在地の古式土師器を一つ一つ細かく観察したうえで、数多くの土師器研究論文を執筆されています。その目的はもちろん、土師器とは何かに着目して古墳時代の始まりを追究しようとすることにありますが、岩崎論文の基本的視点はいつも、土師器の斉一性が畿内から広がっていった点ばかりを強調するのではなく、地方的特色を内包しながら土師器が成立していったことを見逃さない点にあると言えます。

1960年代末に世界中で、そして日本全国で吹き荒れた大学紛争の嵐は、史学方法論教室の運営や土師器研究に尽力されていた岩崎卓也先生のいらした東京教育大学にも大きな波となって押し寄せます。東京教育大学では筑波移転問題を抱えていたため特に複雑で激しい紛争が起きていました。1969年にロックアウトが実施されて、東大と並んで1969年度の大学入試が中止に追い込まれています。この紛争の中で、多くの大学教員は紛争の嵐が過ぎ去るのを待とうとしましたが、東京教育大学の特に文学部の中には、学生たちが問題にしていることから目をそらさずに、学問と社会の関係を自分たちの問題として顧みようとする教員たちがいました。そのお一人が岩崎卓也先生で、このころ書かれた先生の論文の中には、正面からそうした問題を扱ったものが含まれています。例えば、「考古学研究の現状と問題点—研究者の社会的責任をめぐる—」（『史学研究』76, 1970）や「現今の埋蔵文化財問題」（『地方史研究』22-5, 1972）です。これらは、今読み返してみても多くの示唆を私たちに与えます。史学研究76の論文では、大学紛争で学生たちが提起していた本質的な問題、つまり「研究とは何か」「学問とは何か」「どのような立場から学問をするのか」にまともに答えようとしない研究者は、その社会的責任を果たしているとは言えない、と鋭く問題提起をされています。それは、戦前の考古学の反省すべき点は何であったのか、現在われわれはその反省を貴重な糧として研究を

行っているのだろうか、という問いを惹起します。そのために、明治期からの考古学研究、特に国家とは何かという問題に直接かかわる古墳時代研究史を振り返りながら、遺跡・遺物の個別研究に埋没し、それ自体を目的化してしまうような研究を厳しく批判します。それと同時に、社会経済史的な発展史観に依拠して、論拠となるべき遺跡や遺物の史料化操作を十分踏まえずに結論を急ぐ史的唯物論の問題点をも指摘しています。つまり、戦前の皇国史観に対して沈黙ないしは巧みに論点を避け続けたような研究者の姿勢が、考古学の研究目的自体を見失わせてしまったばかりでなく、多くの若者が皇国史観に勇気づけられて死地に赴くのを無為に見過ごしたとするのです。戦後の考古学研究が、このような戦前の姿勢から果たして脱却しているのか、私たちは真剣に問うたことがあるのだろうか、と岩崎先生は自分に厳しく問うています。この論文の最後に、「私ども（考古学）は、遺跡や遺物を通じて背後の人間を描き出そうとする。しかし、それは人間の生活あるいはムラの生活が復元されるだけでは不十分である。そこでは、人間が人間として生き続けるために、如何なる努力が行われたか、そこには、どのような矛盾が内在し、それはどのように隠ぺいされ、あるいはまたどのように克服されていったかを探る視角が必要である。」と、考古学研究の目的をはっきりと述べておられます。先生のこの言は、現在、私たちが考古学研究を行う上での大きな指標となるのです。

大学紛争後の岩崎卓也先生は、それまでの土師器研究に加えて、古墳そのものと地域史に関するご研究が増えていきます。土師器研究には、「古式土師器再考」（『東京教育大学文学部紀要』91, 1973）や「考古学百年史：土師器」（『考古学ジャーナル』100, 1974）などがありますが、古墳と地域史研究としての重要なマイルストーンは、「古墳時代の遺跡・遺物と郷土社会の変貌」（『郷土史研究講座1』朝倉書店 1970）と『長野県森將軍塚古墳』（東京教育大学文学部 1973）でしょう。前者は、1960年代に岩崎先生の指揮の下で大塚考古学研究会の共同研究として実施されていた、長野県での古墳の消長と分布から地方政権の出現と変遷を考察するという研究法を發展させた論文で、特に善光寺平において、集落や祭祀遺構、水田遺構と古墳の在り方を総合して、善光寺平における古墳の発生とその変質を、主として大和王権とのかかわり方と地域における社会構成の変化という2つの側面から推定し、代替わりごとに首長権が複数の集団間を移動していった様相を描き出しています。岩崎先生たちが先鞭をつけた、地域における古墳の消長と分布から地域政権の出現と変遷を考察するという研究手法は、この後多くの古墳研究者に影響を与えることになります。また、森將軍塚古墳は、長野県を代表する著名な前期古墳で、岩崎先生がその調査研究に長年心血を注がれました。これは、前述した「考古学研究の現状と問題点—研究者の社会的責任をめぐる—」において強調された、考古学研究者が研究を行うにあたって、常に地域の社会と関わりを持ち、その成果を地域の社会に還元していかなければならないという教えを、まさに身をもって体現された調査と言えましょう。そして森將軍塚古墳は現在、科野の里歴史公園として整備復元され、近くに建てられた千曲市森將軍塚古墳館と長野県立歴史館が、調査の詳細とその歴史的意義をくまなく人々に伝える役割を果たしています。

1977年4月に東京教育大学から筑波大学に移られた岩崎卓也先生が、どのような思いで赴

任されたのかを推し量ることは、私には少し難しい作業になります。東京教育大学時代に岩崎先生の指導教官であった和歌森太郎先生は、筑波移転反対の急先鋒で文学部長として文学部をけん引しておられ、岩崎先生が卒業された日本史教室からは教員が筑波大学に赴任することはほとんどありませんでした。ただ、史学方法論教室で考古学を先導された増田精一先生と民俗学の直江広治先生は筑波大学に先に赴任されておられましたので、岩崎卓也先生もお二人から強く赴任を勧められていたことは確かでしょう。岩崎先生は、史学方法論教室の最後の学生が卒業した1978年3月まで併任として東京教育大学に残られ、それからは筑波大学の専任教員として筑波大学で考古学を先導されることになります。

筑波大学に移ってからの岩崎卓也先生は、先に赴任されていた考古学の増田精一先生と先史学の加藤晋平先生を立てられながら、先史学・考古学研究室の屋台骨を支える役回りを担われたことは、筑波大学で考古学に関わる者全員が知っています。岩崎先生のご研究の守備範囲は、筑波に移ってからのたいへん広がることになりました。

古墳研究に関しては、古墳の出現とその意味についての論考である「古墳の発生」(『ゼミナル日本古代史 下』光文社1980)、「古墳出現期の一考察」(『中部高地の考古学 III』1984)、古墳出現論(『論争・学説日本の考古学 5 古墳時代』雄山閣1987)、「関東の前期古墳と副葬鏡」(『翔古論聚—久保哲三先生追悼論文集』1993)、「前方後円墳の起源」(『季刊考古学』54, 1996)などがあり、また、先生の教え子の谷延尚さんが編集した教育社新書『古墳の時代』(1990)では、弥生時代から始めて、古墳の出現から終焉までを鮮やかに描き出しています。特に古墳の出現に関しては、初期の前方後円墳の分布や出土遺物の在り方から、大陸との交易に地域間連合形成の契機を求めています。これは、「土器のひろがり」と古墳の出現」(『長野県考古学会誌』71-72, 1994)で述べておられるように、東日本での古墳時代前期での前方後方墳の広がりを征服戦争の反映とみるのではなく、国家形成の契機は戦争よりも交易などの経済活動が重要であった、という先生の主張とも重なり合います。このような主張の背景には、先生が日本との比較研究を深められていた西アジア地域での国家形成の議論、例えば1970年代のコリン・レンフリューの交易仮説や、1990年代初頭のギュレルモ・アルガーゼのワールドシステム論などを読んでおられたこともあったように推察されます。古墳時代研究では、当時の信仰や祭祀についても多数の論文を書かれておられます。「古墳時代の信仰」(『季刊考古学』2, 1983)や、「古墳時代祭祀の一側面」(『史叢』36, 1986)、「三種の神宝の周辺」(『比較考古学試論』雄山閣1987)などで、古墳時代社会における政治と祭祀の問題を論じておられますが、ここでもまた、畿内と東日本との祭祀の違いについて留意すべきことが強調されています。

古墳時代の地域性や地域研究は、岩崎先生のご研究の核心部分の一つです。筑波に移られてから、大学周辺の古墳を熱心に見て回られ、前期の前方後方墳とみなされていた旧筑波町(現つくば市)桜塚古墳や、終末期古墳である旧新治村(現土浦市)武者塚古墳の発掘調査を、学生たちと手がけられました。桜川周辺の古墳の消長と分布を総合調査された『筑波古代地域史の研究』(筑波大学歴史・人類学系1982)は、まさに筑波古代地域史を復元するための礎の資

料となっています。そこでは、長野県の善光寺平や伊那谷で岩崎先生たちが開発された地域研究の手法が用いられました。前述した森將軍塚古墳の発掘調査と研究は、80年代から90年代にかけても長期にわたって継続されています。さらに、長野県史作成の一環として長野各地の古墳時代研究を受託され、筑波大学の考古学実習として様々な古墳の測量調査を実施され、学生たちに『信濃』や『長野県考古学会誌』などに調査成果を執筆させるとともに、長野県史考古資料編に多くの成果が掲載されることになりました。地域史復元の実践として、考古学調査の実施に深くかかわってこられたのです。

筑波大学での岩崎卓也先生は、日本とともに西アジアでも考古学調査を地域史復元のために実践されています。先生が西アジアの調査に関われるようになったのは、助手として勤務されていた東京教育大学に増田精一先生が東京国立博物館から転入されてこられたのが直接のきっかけでした。増田先生とともに、1971年からイランのタペ・サング・チャハマック遺跡調査を開始され、また1974年からはシリアのユーフラテス河中流域での水没遺跡の調査に毎年出かけられるようになりました。タペ・サング・チャハマック遺跡の調査では、西アジアに出現した農耕文化が中央アジアへいつどのように伝播していったのかという問題に関心を持たれています“Tappeh Sang-e Chakhmaq: Investigations of a Neolithic Site in Northeastern Iran” (*Neolithization of Iran*, Oxbow Books, 2013)。ユーフラテス河での水没遺跡の調査では、主に青銅器時代の集落や墓に関心を注がれました *Excavations at Tell Ali Al-Hajj, Rumeilah* (Memoires of the Ancient Orient Museum 4, 2014)。そして先生が隊長となられて、1990年から92年まで、シリア北西部のエル・ルージュ盆地の総合調査を実施されます *Archaeology of the Rouj Basin I* (Univ. of Tsukuba, Studies for West Asian Archaeology 2, 2003)。実はこのエル・ルージュ盆地の調査は、先生が行われた上述の善光寺平や筑波山麓の古墳地域研究の手法を発展的に用い、詳細な編年構築に立脚して、テル型遺跡の消長と分布、さらに自然環境の変遷を考察し、地域における農耕の始まりから都市的集落の発達までを復元していくという、画期的な調査となっています。特に一つの完結した盆地のように見えるエル・ルージュ盆地も、古環境を復元してみると中央に湖が広がる時期が長く、新石器時代や青銅器時代には湖によって盆地内がいくつかの政治経済的集団に分断されていた状況を描き出したのは、注目すべき成果と言えましょう。岩崎卓也先生は、その前後にも同じシリア北西部にある、テル・マストゥーマ遺跡やテル・エル・ケルク遺跡の発掘調査に参加しておられました。

ここまで、岩崎卓也先生の東京教育大学と筑波大学時代のご研究の背景について、私なりに分かったこと、見たこと、感じたことについて書いてまいりました。岩崎先生には、古墳時代や西アジアのご研究のほか、貝の花貝塚の発掘調査報告書など、縄文時代のご研究などにも触れなくてはならないものが多いのですが、十分に言及することができませんでした。私が浅学非才なため、先生のご研究の全体像について、うまくまとめられていないことはお許しいただきたいと思います。この冗長な追悼文を終えるにあたり、最初の問いに戻りたいと思います。それは、岩崎卓也先生が筑波大学考古学教室で学ぶ私たち後輩に託されたメッセージについて

考えてみることです。岩崎先生が学生として過ごされた時代は、今の私たちにはとても想像がつかないような、戦争による激動の時代でした。多くの先輩を戦地で失い、その先輩たちはお国のためにと言って亡くなったのです。岩崎先生が考古学を通じて明らかにしたかったことは、まさに国家とは何か、ということだったのだと思います。先生は、形而上的にものを考えてはいけな、実際の考古学調査を通じて資料を集め、その資料に基づいて国家とは何かを考えなければならないと表明しておられます。先生の戦略的な資料は、土師器であり、古墳の消長であり、地域研究でありました。そしてそこから得られた先生の解答は、国家とは決して中央権力が戦争によって周辺を画一的に覆っていった成立したものではなさそうだ、ということでした。むしろ各地域に独自性があり、独自性を持った地域が交易などの経済的交流のもとに共有する関係を見出しながら成立していったのではないか、という確信でした。ですから、もし岩崎先生が、戦地でお国のためにと言って亡くなられた先輩たちに、国とはなにかと説明されるならば、それはけっして一つの軍事的に強固な皇国などではなかったはずです。それぞれお国自慢をするような先輩たちの故郷が集まってできた、多様な、それでいて互いに共有するものがあるそんな関係ですよ、と説明されるのではないのでしょうか。

少し情緒的な説明になってしまいました。しかし岩崎先生のメッセージでとても大事なものは、「研究することが目的である」というような研究者の姿勢は決して容認されない、ということです。考古学は、人々に、社会に寄り添って、歴史のウソや真実をはぎ取って行ってこそ、その存在が許されるのです。私たち残された岩崎先生の後を歩く者は、決してそれを忘れることなく、日々精進しなければならないのです。

先生の不肖の教え子として 常木 晃